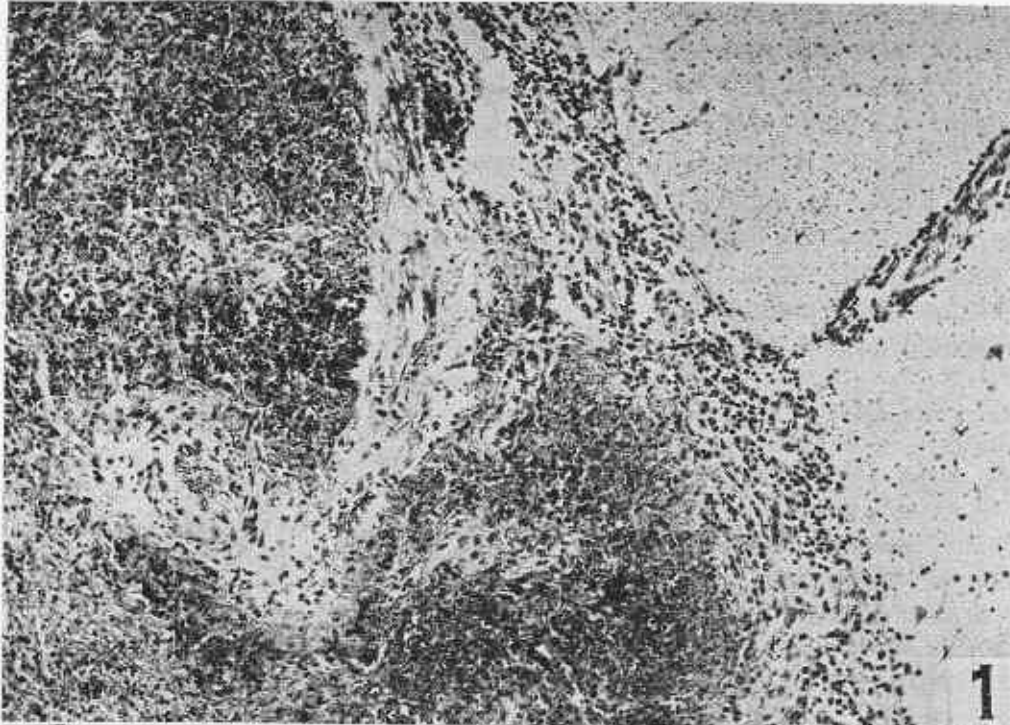
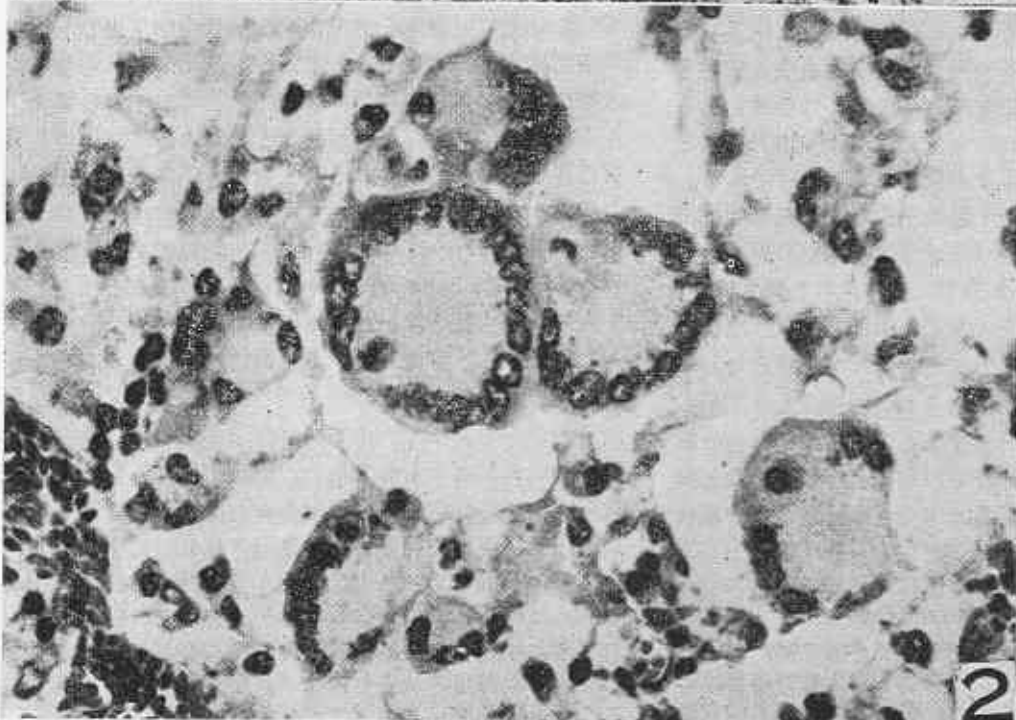


# 日生研たより

第 8 卷 昭和 37 年 6 月 第 6 号



が多発して居り、肺門リンパ節は乾酪化して居た。死の数日前から失明して居たらしいので脳を検査したところ、脳底軟膜が延髄から視神経交叉に至る間著明に濁濁肥厚し、精査すればケン粒大灰白色の微細な結節も散在する。側脳室、第三脳室は著明に拡張し、多量の透明な脳脊髄液を容れる。1)は延髄軟膜の所見で、かなり増殖性の傾向を帯びた乾酪化病巣で多数の巨細胞も認められる。多数の血管がまき込まれて居り、小動脈の内膜が著しく増殖し、一部には閉塞性動脈内膜炎の像を認めた。写真に見られる様に脳実質側にはリンパ球が浸潤し所々血管と共に脳実質内に進入して、囲管性細胞浸潤の像を呈する。H・E×60 2)は肋膜直下の大型乾酪性病巣の周辺部でこの結節の中心部には石灰沈着もあり銀線維の形成も著明であるが周辺部は乾酪性気管枝肺炎の所見を呈し、又写真に見られる様なラ氏型巨細胞を主体とした繁殖性病巣が混在する。H・E×



## しかの結核症

(第 2 回獣医病理学研修会標本 No. 28)

東大農学部家畜病理学教室

屋久島鹿 雌 5~6才 肺に大豆大乃至榛実大の結節

320 この例の脳膜および肺病巣の直接塗抹には夥しい数の抗酸菌が証明されたがこの様に無数の菌が証明されることは哺乳動物の結核症としては異例のことに属する又本例からは発育極めて旺盛な抗酸菌が分離され海狸と家兎を用いての病原性試験では人型結核菌と判定されるものであつた。